

妖精の尻尾と酒天童子 番外編

月詠隴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品。

タイトル通り表に投稿中のわっちの二次創作の番外編になります。

本編見てないとわからないこともあります。

原作知らないとわからないことも多々あります。

知識なくても見たいんじゃないじゃーって人はブラウザバック推奨です。

問題ない、行けて人は見てください。

目次

それなりに近く、限りなく遠い世界から

その1 萃香、東の秘境へ | 1

その2 結局、酒、酒、酒。時々宴会。 | 4

何度目かの夢時空 | 8

それなりに近く、限りなく遠い世界から

その1 萃香、東の秘境へ

「はあ？評議院から依頼だつてえ？」

「うむ。萃香もS級魔道士になったじやろ？他の奴らには任せられん難易度の、突発的な仕事をS級魔道士にと持ってこられてなく。それでな？お前さん以外のS級魔道士は全員出払つとるんで、行って欲しいってわけじゃ」

S級魔道士になつてからしばらく経った頃のこと。

マカロフに呼びだされて、何事かと話を聞きに行ったら面倒事を押し付けやがった。

「ええ……嫌だよ、面倒くさい。確実に厄介な仕事じゃあないかい」

確実に仕事達成に2週間とかかかる仕事だよ嫌だ絶対。働きたくないでござるう！

「まあそう言うな。最近クエストを受けてなくて宴会用の資金もなくなつてきておつたら。報酬金は3500万Jなんじゃが」

「やろう。さあ、詳細の説明を」

地獄の沙汰も金次第つてね。

「か、変り身はやいなおい。えーつと場所は、向日葵村。なんでも今まで影も形もなかった遺跡が突然現れ、その後、その場所から消えたり、同じ場所に現れたりするようになったそうじゃ」

「現れたり消えたりする遺跡ねえ……その遺跡の調査しろと？」

「それがのお、調査のために派遣された魔道士が遺跡内部から戻つてこず、入つてから数時間ほどで遺跡が消えてしまうそうじゃ。現地の人々からは、現れたり消えたりする遺跡が夢や幻ゆめまぼろしなもののように見えることから、『夢幻遺跡』むげんなんて呼ばれておるらしい」

夢幻遺跡？どつかで聞いたことがあるような無いような……？

ともかくまあ、厄介事なのは確定かあ。未帰還者でてるみたいだし。まさかと思うが、魔道士を捕まえるための施設みたいなものじゃないだろうねえ。

「んで、期限とかはあるの？」

「いや、調査をして無事に戻ってきてもらえればいいらしい。出来れば現れないようにするか、消えないようにするかして欲しいらしいが」

「ふうん、了解了解。そんじやま、たまには働きますかねえつと」

そんな訳で、宴会資金のために。ついでに、遺跡の名前の既視感？既聴感かな？が気になったので依頼を受け、東の果てにあるという向日葵村へと向かうこととなった。

汽車に馬車に徒歩。山越え、谷越え、密林越えて、やって来ました向日葵村。

早速情報収集をと村をあっちへふらふら、こっちへふらふら。霧散しても良かったけれど、これほど遠くに来たのも初めてだし、たまには歩いて見て回りたいと思ったので止めた。

向日葵村から少し行った場所には、太陽の花畑と呼ばれる一面向日葵が咲き誇っている場所があるらしい。管理人もいるとか。

………まさかねえ？

村の活気はそこそこで、遺跡に関してはまたかと呆れはすれど、その他の恐怖やら興味やらは殆ど無いらしい。あえて挙げるなら鬱陶しいので出て来ないで欲しいな、程度の反応である。どうもそこに在るだけであり、周囲への影響は無いらしい。一応確認のため数日ほど様子を見ることにする。

が、遺跡が出たと言われた場所へ行ってみたら、現在は消えているようである。とりあえず、情報収集を続ける。

そして聞き出した言い伝えはというと。

「古くからの言い伝えによるとじやな、この遺跡には来た者をしあわせにする何か眠つてるといふ話じや」

……なんなのさ、その怪しげな宗教の勧誘みたいな言い伝えは

さらにどうやら、一番最初に遺跡が現れた時にこの言い伝えが書かれた『上質な真新しい紙』が村に大量に出回ったということだ。実物も見せてもらったが……

……流石にこれは無い。見終えた瞬間に粉々にした私は悪くないはずだ。絶対。

更に詳しく聞くと、どうやら紙がばら撒かれるより以前にこの話は無かったようである。紙に古の遺跡だとか書かれていたので、それが原因であると思われるが……開店とかご来店とか書いてある時点で信じるなよ。

そして粉々にしてしまった紙だが、書いてある内容が臆気ながら既視感があった。なんだったかなあ？

とりあえず、遺跡が出てくるまでしばらく観光と洒落込もうかねえ。

しかし、どうもこの村は既視感塗れである。

はてさて。

番外2へ続く。

その2 結局、酒、酒、酒。時々宴会。

さてさて、向日葵村に滞在して早いもので、すでに1週間ほど経過している。

遺跡が現れる場所だと案内された神社の裏手には、依然遺跡なんぞ現れる気配もなく。いい加減このまま待ち続けるのもいかなものかと思い始めている所。

ちなみに1週間の間、何をやっていたかというところ、この辺の探索をしていた。

太陽の花畑に行ってきた、花畑の世話をしていたチェック柄の少女と一緒に、綺麗な景色を見ながらちよつとだけ季節外れな花見酒をした。

神社の裏手にある池にいた言葉を話空も飛べる不思議な亀さんと一緒に月を見ながら酒を飲んだり。

きのこがたくさん生えている森で出会って仲良くなった悪霊さんと意味もないことを喋りながら森の中を案内してもらったり、彼女の弟子と彼女が作ったというキノコ酒を頂いたり。

魔界から人間界旅行に来たという糸目の少女と仲良くなって、今度魔界に遊びに行くと約束を交わしたりと、それなりに充実した日々を送っていたけどね。

「遺跡は出ない、観光も終わった。どうしたもんかね〜」

「なあに、もうすぐ出ますよ御客人様」

「そうさね、きつと近いうちに出てくるさ」

「だといいいんだがね」

私のボヤきを返してくれる亀さんと悪霊さん。

現在、神社の縁側で亀さんと悪霊さんと神社の神主様と満月を見ながらお月見宴会中です。

神主様に神社で酒を飲みたいから場所貸してとお願いしたら「私も

混ぜてくれるなら構いませんよ、んふふ……」と許可をくれた。

ならばと、こちらで仲良くなつた4人を一緒に呑もうと誘つてみた。で、来てくれたのが亀と悪霊さんの2人である。

ちなみにみんなが飲んでいる酒は、私の持っていたひようたんからの提供と神主様が貯蔵していた麦酒を頂いている。それをものすごい勢いで飲み干していく1人とチビチビと飲み進める2人。亀さんはアルコールを分解する仙術を使っているらしいし、悪霊さんの方は曰く「霊体は酔いにくいだよ(うそ)」らしいからまだ納得できるのだが。

神主様。なぜあなたは平気な顔して私の酒を次から次へと飲み干していくのですか？私より飲んでるとかちよつとドン引きなんですけど。

「しつかしまあ、私の酒をそんなにドバドバ飲んで大丈夫なのかい？神主さんよ。この酒、相当度数が高いんだけど」

「んふふ、だってこんなに美味しいじゃないですか。まだまだ呑けますよ」

「そ、そうかい」

体は大丈夫なのかと聞いたら、いい笑顔でまだまだいけますと帰つて来た。種族的には唯一の人間だというのに、この中で一番の飲酒量。しかも私が場所使わせてと行つた時にはすでに彼の周りには麦酒の空樽が4個ほど転がっていたのだが。

「こりやザルどころかワクだね。ここにや始めてきたけど、(うそ)こんなに呑める奴がココの神主だとは知らなかったよ」

「私も長いこと神社の池に住んでいます、ここまで飲める方だとは知りませんでした」

「別に隠していたわけではありませんよ。日頃から飲んでますし。今日もココに来る前に麦酒の樽を6個ほど空けてきましたしね」

「うひゃあ、あたしがお願いしに行つてから更に2つ開けてたのか!?!しかもあれから1時間ほどしか時間がなかったのに」

「貴女の持ちだというお酒が呑めると聞いて、楽しみで楽しみで……ついで、ね。んふふ」

「酒を呑むのが楽しみでその前に酒を飲むってなにさ（なんですか）」

すさまじいの一言である。

周辺に住んでいる酒飲みであることを知っている人々から、『酒の精霊』とか『酒妖怪』とかなんて呼ばれているだけはある。

「しっかし、このまま遺跡が出なかつたらどうしようかねえ……。魔界に遊びに行く約束した事だし、そっちに行こうかね」

「そういえば先程も言っていましたけど、貴女は神社の裏手に出てくる遺跡の調査に来たんですっけ」

「調査して、出来れば出たままにするか、出ないようにするかしてこいって言われたのさ。村の人たちの反応見てきたけど、誰も彼も困つてなさそうだし、別に放置してもいいんじゃないかって思えるけどね」

「むしろ困っているというよりは、面白がっているように見受けられますが」

「あたしやあんまり興味ないけど（うそ）」

「ふうむ……………ンフフ、萃香さん。今日のお礼にこの神社の神様にお願いしてみましようか」

「神様に頼む？どーいうことさ」

「いえ、ただ単に神頼みって奴です。一般人がやるより効果あるんですよ……………ンフフ」

「うーん……………そうだねえ。ただ待ってるだけってのもアレだし、やってくれるってんならお願いしようかね」

「では明日の朝、此処に来てください」

そんな会話をして、この日はお開き。

神様に供えるお神酒として、酒樽1個分ほど神主様に渡してから、この村での宿泊先として使わせてもらっている寺子屋の先生の家へ。家主はどうやら、徹夜で歴史書の修正をするつもりの様であるので、声だけかけて先に眠らせてもう事にする。

神主様が神頼みをしてくれるというが、あまり期待はしていない。

最初に見せてもらった紙に書いてあった、開店時間とやらは10時

となっていたのでテキトーに時間を見て現地に行くでしょう。

流石に神頼みでポロツと出てきたりはしないだろうと、高をくくっていた事を後悔することになるとはこの時の私は知る由もなかった。

翌日、午前10時半、神社裏手。

そこには、昨日は影も形もなかったはずのかなり大きな遺跡が、その場所にその存在を主張するかの如く建っていた。

「……フア!？」

その3へ続く。続くとしたら続く。

何度目かの夢時空

この世界に何度目かの到着。

例のごとく、神社の裏手に可能性空間移動船を止める。毎度の如くチラシをバラ撒き、船の入り口に看板を立てるウチのバカ助手。まあお陰で何もしなくても魔道士観察対象がやってきてくれるので何も言っていないけれど。

私こと岡崎夢美は、現地に到着と同時に周辺にいる人々の観察をするために、村をあっちへふらふら、こっちへふらふらと回っている所である。

この世界は当然ながら、科学を信じてる人などほとんどいない。魔道士が幅を利かせているのを見て分かるように魔法が主である。

私が居た世界では、重力・電磁気力・原子間力等の全ての力は統一できるなんて証明されていて、それに当てはまらないモノはないとされている。

私は、この統一原理に当てはまらない力である魔力が存在する『非統一魔法世界論』を発表したところ、思い切り笑われ相手にされなかった。学会に魔力、魔法の存在を認めさせるために私は、可能性空間移動船を使ってこの世界へと何度も足を運んでいる。あまり成果はよろしくないが。

しかし、何度来てもこの世界はとっても素敵である。一般人ですら魔法を使う事のできる世界。

正直なぜ私は、この世界に生まれなかったのかと、生まれ育ちたかったと望んでしまうほどに素敵な世界であった。

「うーん、やっぱりこの世界は、私にとって夢の様な世界ね。まるで楽園。ああ幸せだわ。魔法がこんなにいっぱいあるなんて。しかしまあ、今回で終わりに出来ればいいのだけれど……」

何時もの開館？時間までまだまだ余裕があったので、ふらふらと村を見て回っていると、バカ助手のバラ撒いたビラの噂を聞いたのか、この前には居なかった魔道士たちの姿がチラホラと確認することが

できた。

「あら、雨女の魔道士さん？素敵ね」

道端の落ち葉を女の魔道士が彼女の周りにだけ降っている雨を操り集めている。魔法で。素敵。

「ポリゴンみたいにカクカクした顔の人も素敵ねえ」

顔がカクカクしている人は畑を耕すのを手伝っている。魔法で。素敵。

「ナマハゲっぽい仮面の人も素敵。ああ、素敵だわ！」

緑色の髪の毛のナマハゲっぽい仮面をつけたおじいちゃん……おばあちゃんかしら？も屋根の上をピョンピョン跳ねながら進んでいる。機械の補助なしなので魔法の補助をうけているのだろう。ああ、素敵ね。

そんな魔道士たちの行使する魔法を見ながらウツトリしている内に、いつの間にか神社の裏手……船の入り口まで戻ってきてしまっていた。

「あら？私つたらなんで戻って来ちゃったのかしら。まだまだ見て回りたいと思っていたのだけど」

「そりゃアンタ、アタシがこの遺跡の主殿に出てきてほしかったから、魔法でこっちに来てもらったからさね」

「あら、素敵ね。そんなことも出来るなんて」

そう言いながら振り返ると、神社の縁側でお酒を飲む小さな女の子がいた。

「いや、悪いねえ。ちいっと話がしたかったもんだからさ」

「いいえ、とつても素敵な体験をありがとうお嬢さん。お名前は？」

朝っぱらからお酒を飲んでいる小さな子という、私の世界だったらちよつとアレな娘に名前を尋ねてみる。もしかしなくても成人しているのかしら？

「それはどういたしました。始めまして、伊吹萃香だ。むず痒いからお嬢さんなんて呼ばないで、萃香って呼んどくれ」

「ええ、分かったわ萃香。私は岡崎夢美。そうねえ、岡崎でも、夢美でも好きな様に呼んで頂戴。私は、平行世界……って分からないか「分

かるよ」そう。平行世界から魔力の研究に来たの」

「りよーかい、夢美。しっかし、魔力の研究ねえ……」

「魔力の研究というか。魔力、ひいては魔法が存在するって証明がしたいのよ。私の住んでるところでは、全ての力が統一原理によって……私の専門は比較物理学で……統一原理では証明できない力があるところ……見返してやるためにこの世界へやって来たのよ」

「なるほどねえ」

話を聞いてくれそうな雰囲気を感じて、つい長々と私の世界について説明をしてしまった。

彼女……萃香は、嫌そうな顔をせずにしつかりと聞いてくれた。とても聞き上手な子だと思う。

「ふうん、なら適当にこっちの世界で魔道士をとっ捕まえるなり、魔法を覚えて帰るなりすればいいんじゃないの?」

「もちろん、魔道士を連れて行くのは、研究が行き詰まればやむ無しね。魔法を覚える方は……ダメだったのよ」

「まあ、とっ捕まえるのはやり過ぎだとアタシは思うけどね」

「当たり前よ。ちゃんと交渉してお願いするつもりだよ」

「そうかいそうかい、なら別にかまわないんだ。それでなんだが、夢美さんや。あたしがあんたをわざわざ呼び出した理由ってのは、その船に入った魔道士が行方不明になってるってんで調査しに来たんだ。そのへん……どうなんだい?」

「あらあら? 船に入ってきた彼らなら、ちゃんとお願ひして協力してもらって、その後彼らのお願いを聞いて叶えてあげてから帰ってもらったのだけれども?」

ちゃんと私はお帰り願ったはずなんだけれど。どうなっているのかしら?

詳しい話を聞いた所、どうやら彼女は突然現れる私の船の調査を依頼されてここに来ているらしい。とりあえず、今回も馬鹿助手がばら撒いているであろうチラシと、船の入り口に立てられた看板を見せる。

チラシのほうは前回までのやつを見たからイイといわれたので、船

の入り口へと案内をする。

@
@

夢幻遺跡内 定員 1名まで

それ以上は、認められません
—
規定人数以上、入場された場合
—
この時空での遺跡の存在は保証

出来ません

「あー……もしかして。もしかしなくても、か。二人以上……入れて
ない?」

「私は入れてないハズよ。多分うちの馬鹿助手が入れてるかも……」

あの馬鹿、やっちゃったかも……

次回へ続く。